

*Tattvasaṃgrahapañjikā* における *Śālistambasūtra*

藤 井 真 聖

[1] はじめに カマラシーラ, Kamalaśīla (K) の *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP), *avayavārtha*<sup>1)</sup> には次のような經典が引用される。

〈A1〉この芽は①自らによって作られたのではない, ②他によって作られたのではない③〔自他の〕二者によって作られたのではない, ④自在神によって仮作されたのではない, ⑤時間によって変化したものではない, ⑥プラクリティから生じたのではない, ⑦b 一つの原因に依存するのではない, ⑧無因より生じたものでもない. TSP (G) [11:1-2] (B) [13:18-19]

上記の句〈A1〉は *Śālistambasūtra* (ŚSS) の一節として知られるものである。この經典はシャーリプトラがマイトレーヤのもとに行き「縁起を觀る者は法を觀る, 法を觀る者は仏を觀る<sup>2)</sup>」という世尊の言葉の真意を問うところから始まり, 以下縁起についての解釈がなされるという内容になっている。ŚSS はパーリ聖典などとの関係が指摘されるものであり<sup>3)</sup>, K 以外にも Candrakīrti, Yaśomitra, Śāntideva (Ś), Prajñākaramati (P), などの論師が引用したことは skt が再構成される要因となった<sup>4)</sup>。また同經典はチベット訳および五種の漢訳<sup>5)</sup> も得られる。K はこの經典をどのような立場で引用したのであろうか。本稿では TSP に引用される ŚSS を中心とし TSPadTsl-2 偈に引用される他の經典なども視野に入れつつ, TSP におけるカマラシーラの立場について考察する。

[2] 中觀論書を中心とした ŚSS の引用 まず中觀論書を中心とした ŚSS の引用についてみる。

[2.1.1] *Prasannapadā* (PP) 1 章<sup>6)</sup> [26:5-6, Poussin 本] (外縁起): ここにみられる「自らによって作られない」以下の項目は先程の TSP 〈A1〉やこれからみる各文献における ŚSS ものと比べるとやや異なる。プサン本で言うなら順序 (例えば無因が四番目にくこと) や否定辞のかかりかたが通常の ŚSS と異なっていることが分かる。skt は次のようになる。[-① -② -③ -⑧ - { ④ ⑤ ⑨ ⑥ ⑩ } ]。 (ハイフンは否定辞, ⑨は aṇu, ⑩は svabhāva) ただしチベット訳は〔例え

ばデルゲ版 (D) のように] 順番や否定辞のかかり方が skt とはことなり、むしろこちらのほうが通常の ŚSS に近い。しかし通常のものに比べると順序の違いや anu などが入っているという特徴を残す。[(D) - ① - ② - ③ - ④ - ⑤ - ⑨ - ⑥ - ⑩ - ⑧]。

[2.1.2] PP 26 章の場合 (内縁起, A1') : 『中論』26 章は縁起の 12 支について考察する。同章 12 偈では、苦を減するためにそれらの縁起の各支分を減する必要性を説いている。PP によると縁起の修習によって真実に入ったヨーガ行者においては無明が減せられ、そのことから諸行が減せられるように縁起の各支分が減せられるのである。従ってヨーガ行者はこのような連続から苦蘊が生じないことにより正しく減することができるのである。ここで PP に引用されるのは内縁起が二種であることを述べ、内縁起の因相応、内縁起の縁相応、内縁起の五相を説く部分までであり、PP [560:3-570:2], ŚSS の内縁起の部分である。V. V. Gokhale によって *Madhyamaka Śālistambasūtra* (MŚ) と呼ばれるものでは [110:11-113]<sup>7)</sup> に相当する。

[2.2] *Śikṣāsamuccaya* (ŚS) [219:10-227:10, Bendall 本] (内縁起) : Ś は貪・嗔・痴の三毒を断ずるための対治として不浄・慈愛・縁起の瞑想を説く<sup>8)</sup>。ŚS が用いられるのはこのうち痴の対治 (すなわち縁起の観察) を説く部分である。(MŚ [110:1 - 114:22]) なおこれに後続して *Daśabhūmikasūtra* 『十地経』が引用されるが、これは MŚ のそれと同じものである。(『十地経』(近藤本) [101:2-8] + [102:11-14] = ŚS [227:11-228:6] = MŚ [114:23 - 115:4]) つまり MŚ と ŚS は『十地経』の全く同じ編集部分を共通に持つことになる。このようなことから ŚS と MŚ の密接な関係が窺える (Schoening [1995:10-11] も参照)。

[2.3.1] *Bodhicaryāvatārapanjikā* (BCAP), [269:8-270:18, Vaidya 本] (外縁起) : P は Ś の BCA 9 章 142 偈 cd 句を解説した後、自・他・[自他の] 二者・無因の各項目による生起がないことを説いてゆく。そして「自」以下の各々より生じたいかなるものも真実としては存在しないが、縁性については世俗として否定されないことに関して引用されるのが ŚSS であり、ここではマイトレーヤの返答の最終部分から引用され、一部省略もあるが、外縁起・内縁起に大別する部分、外縁起の因との結びつき (因相応) 外縁起の縁との結びつきの部分までである。(MŚ [108:18-109:27])

[2.3.2] BCAP, [225:11-226:27] (内縁起) : 9 章 73 偈に関する注釈中、『父子合集経』に続いて引用される。内縁起の十二縁起に関する解説部分のうち異説を説

く部分から引用され、(途中若干省略があるが) 内縁起の五相(因)の部分まで [M111:23 - 114:13]

[2.4] *Sarvadharmaniḥsvabhāvasiddhi* (SDNS): SDNS において ŚSS の「自らによって作られない」以下の項目を持つ句が引用されるのは「縁 (pratyaya) からの生起」を主張する対論者<sup>9)</sup>を批判する部分であり、SDNS の論理 (yukti) による無自生論証の最終部分である<sup>10)</sup>。K は ŚSS をナーガールジュナの『中論』と結びつけ、世尊も ŚSS の中で四句 (自・他・自他の二者・無因) による生起を否定しているとする<sup>11)</sup>。

[3] TSP におけるカマラシーラの立場 では TSP において ŚSS を引用する K の立場はどのようなものであろうか。TSPI-2 偈の他の經典引用も参照しつつみてみよう。TSP には次のような經典も引用される。〈A2<sup>12)</sup> TSP(G)[11:5-6] TSP(B)[14:1-2]〉”kṣaṇikāḥ sarvasaṃskārā asthirāṇāṃ kutaḥ kriyā / bhūtir yeṣāṃ kriyā saiva kārakaṃ saiva cocyate”。〈A4<sup>13)</sup> TSP (G)[11:23-24] TSP (B) [14:21-22]〉”sarvaṃ sarvaṃ iti brāhmaṇa yāvad eva pañca skandhā dvādaśāyatanāṇy aṣṭādaśa dhātavaḥ” 渡辺 [1967], BBS とともにこれらの句についての出典や、同じ句を引用する文献には言及しないが、同じ句を引用するものとしては先程 ŚSS との関係で注目した BCAP がある。即ち BCA 9 章 6 偈 cd を注釈するなかにみられる。Ś は BCA 9 章 6 偈 ab 句において直接知覚 (pratyakṣa) される色なども実は世間的な常識 (prasiddhi) によるものであり、正しい認識手段ではないことを述べ<sup>14)</sup>、BCAP における P はその根拠をナーガールジュナにもとめる<sup>15)</sup>。これに対して反論する対論者に述べられたのが 6 偈 cd である。一方直接知覚という認識手段による常識の成立を否定された対論者は存在が蘊・界・処を本性とし、また刹那滅を本性とすると世尊が述べていることを指摘する。

もし、直接知覚によってそれ(色)が成立しないのであれば、その場合經典によって〔成立〕するであろう。即ち世尊は存在を蘊・界・処などの本性として説示したのである。また刹那滅などの本性としても〔説示した〕<sup>16)</sup>。

ここで上記の TSP の二つの經典〈A2〉〈A4〉が引用されるのである。周知のごとく BCAP は TS の偈を多く引用し、シャーンタラクシタの影響を受けていることが指摘されている<sup>17)</sup>。K の TSP を知っていて、あえて引用した可能性もあるのではないだろうか。さて、TSPI-2 偈相当部分では対論者によって〔縁起が〕動的 (TS. klb) であるのだから、行為と結果の結びつき等の状態の拠り所となる (TS. klc) 縁起が成り立たないと批判される<sup>18)</sup>。これに対する反論中に *Paramrtha-Sūnyatāsūtra*, 『勝義空性経』が引用される。

〈A3<sup>19)</sup>〉それ故比丘たちよ、ここに行いがあり、結果がある。しかし法の協約に基づく以外に蘊を捨てて、他の蘊をとる作者は得られない。ここで法の協約というのは「此あれば彼ある」という意味である。

『勝義空性経』は『瑜伽論』の縁起に関する論議において重要な役割をもつ。この聖典自体は有部においても意識されていたようであるが、宮下 [1986] は『瑜伽論』撰事分や声聞地における『勝義空性経』の問題について考察し、同縁に関する解釈としての「本無今有」論は『瑜伽論』の縁起論の基底をなすと指摘する。さらに TSPI-2 偈相当部分には 〈A5〉 *Bhavasamkrāntisūtra* 末尾第 2 偈が引用される。この聖典も『瑜伽論』『菩薩地』に引かれており<sup>21)</sup>。ヴァスバンドゥも *Vyākhyāyukti* において引用する。ŚSS はこのように『瑜伽論』やヴァスバンドゥの重視した聖典とともに TSP の縁起をめぐる文脈において引かれているのである。

[4] まとめ これまで ŚSS は主に中観派の縁起を説く文脈と関わって用いられるという印象が強かった。今回注目した TSP の場合、*Prakṛti* をはじめとする様々な原因を説く対論者に対して、それらを離れた縁起を仏陀が説示したということ述べ、縁起を対論者の批判から擁護するという文脈において ŚSS の外縁起部分の句が用いられているのである<sup>22)</sup>。そして、その際に SDNS などのようにナーガルジュナを重視するのではなく、『瑜伽論』がその經典解釈として重用視し、またヴァスバンドゥの引用する經典 〈A3〉 などとともに用いるのである。このことは K の他の中観論書とは著作目的の異なった TSP が唯識的な聖典観を受け継いでおり、ŚSS が中観派の縁起を説く文脈以外でも用いられる一例と言える。

1) カマラシーラはまず、師シャーントラクシタ (Śāntarakṣita) の *Tattvasamgraha* (TS) についての主題 (abhidheya) や目的 (prayojana) などを述べた後、この部分に入る。TSP (G) Gackwad's Oriental Series (B) Bauddha Bharati Series.

2) 斉藤精也「稲苧経の成立」『法然学会論議』1. [1960:71] では *Majjhimanikāya*: 28 や *Samyuttanikāya* (SN) を参照している。

3) 斉藤 [1960:72] SN.X II :55-57 など参照している。

4) L.De la Vallée Poussin *Bouddhisme:Études et Matériaux, Théorie des douze Causes, Recueil de travaux publiés par la Faculté de philosophie et lettres de Université de Gand*,1913. 浅野守信「稲苧経の諸テキスト—その原型と発展—」『佛教学』31 [1991:25] 参照。

5) 大正 No.708-712, その他, ŚSS そのものの翻訳ではないが『佛阿毘曇経出家相品』は ŚSS と多くの共通点を持つ。Sasaki『印仏』(33-2) [1985] は『了本生死経』と『佛阿毘曇経出家相品』との関係について言及する。

6) 渡辺照宏「撰真実論序章の翻訳研究」『東洋学研究』2, [1967] 参照。

- 7) Vaidya 本, 以下の中観論書との対応箇所については, 先述のプサン本や Jeffrey D. schoening, *The Śālistamba Sūtra and its Indian Commentaries*, Wien, 1995. などを参照.
- 8) 田村智淳「中観派の実践—寂天の『東洋学研究』2 [1982:270-271]」.
- 9) 森山清徹「カマラシーラの無自性論証とダルマキールティの因果論」『佛教大学研究紀要』71, [1987:50] はカマラシーラが SDNS や *Madhyamakāloka* において「縁からの生起」を論破する際, ダルマキールティの自己照明 (prakāśa) = 自己認識 (svasamvedana) 理論を批判対象としていると指摘する.
- 10) 森山 [1987, 72:17-21]
- 11) 森山 [1987:72].
- 12) sthirabhāva-parikṣā (8 章) に関する経典, 1 偈相当部分で引用される.
- 13) śaḍpadārthaparikṣā (11-15 章) に関する経典, 2 偈相当部分 Cf.AKBh [301:7-8] sarvam astiti brāhmaṇa yāvad eva dvādaśāyatanāni. 秋本勝・本庄良文「俱舍論—三世実有説 (訳註)」『南都佛教』41, [1978:95] とその付論 [7] 参照. 同論文付論 [7] によると雑阿含 13, パーリでは SN 35-23 Sabba であることが分かる.
- 14) pratyakṣam api rūpādi prasiddhyā na pramāṇataḥ /
- 15) BCAP のテキストでは Catuḥstava 3,18. となっている. 塚田貫庚「入菩提行論細疏第 9 章試訳」『大崎学报』146, 注 (20) では Lindtner に従い Acintya stava 19 偈とする.
- 16) BCAP [181:7-8] yadi na pratyakṣapramāṇāt tat śiddhiḥ āgamāt tarhi bhaviṣyati / tathā hi skandha dhātva āyatanādisvabhāvatayā bhagavatā bhāvāḥ sūtre deśitāḥ kṣaṇikādi svabhāvatayā ca /
- 17) Vaidya は BCAP の序 [X] において P の TS 引用を根拠にその年代を 8 世紀終盤もしくは 9 世紀初頭とする. 白寄顕成「Jitāri と Prajñākaramati」『密教文化』152, [1985:78-80] では他の論師との関係から 10-11 世紀とする.
- 18) TSP [11:8]
- 19) TSP (G) [11:13-15] (B) [14:10-12]『勝義空性経』に関して, 宮下晴輝「『俱舍論』における本無今有論の背景 —『勝義空性経』の解釈をめぐる—」『佛教學セミナー』44, [1986] からは skt の再構成が得られ, 松田和信「縁起にかんする『雑阿含』の三経典」『佛教研究』14, [1984] からチベット訳の校訂や和訳が得られる.
- 20) 宮下 [1986:25] の問題については原田 [1997] 付論 II も参照. 筆者は当初〈A3〉の句が『勝義空性経』であると気付いていなかったが, 龍谷大学の原田和宗先生に御指摘いただいた.
- 21) この問題については拙稿藤井『印仏』2004 (53-1)PP(131)-(134) 参照.

〈キーワード〉 *Tattvasmṛagrahapanjikā*, *Śālistambasūtra*, Kamalaśīla, 縁起

(佛教大学大学院)

states in the *Abhidharmakośabhāṣya* that the *ātman* is equated with *pudgala*, *jīva*, *sattva*, etc. In the early stage of Abhidharma Buddhism, these terms represented the person as a provisional designation and as being distinct from the *ātman*. After that, in the *Jñānaprasthāna*, they became synonymous with *ātman* under the influence of the Pudgalavādins. This identification of the *ātman* and those terms should be thought of as a surprising change in the history of Buddhist thought which denied the *ātman*. Moreover, this identification also influenced Mahāyāna Buddhism.

## 182. *Samāropa* and *Apavāda* in the Doctrine of the Three Self-natures

Noriaki AZAMI

In this paper, I study the doctrine of the Three Self-natures (*trisvabhāva*) in the philosophy of Consciousness-only, and focus more particularly on *samāropa* (*sgro 'dogs pa* 増益) and *apavāda* (*skur pa 'debs pa*, 損減). In the doctrine of Consciousness-only, *samāropa* means 'to see something in the non-existent'. According to the Yogācāra school, *samāropa* and *apavāda* are frequently mentioned in commentaries on emptiness. The Yogācāra school stresses the importance of the fact that these two notions should be used in the commentaries on the Three Self-natures. This paper examines several commentaries dealing with the relationship between *samāropa* and *apavāda* and the Three Self-natures in order to better understand this relationship.

## 183. On the *Śālistambasūtra* in the *Tattvasaṃgrahapañjikā*

Shinsei FUJII

The following expression of the *Śālistambasūtra* (ŚSS) *sa ca ayam añkura svayaṃ kṛto - nāpyahetuḥ samutpanna* (A1) is quoted in the avayavārtha of Kamalaśīla's *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) GOS [11:1-2] (B) [13:18-19]. ŚSS contains a phrase similar to (A1) in its adhyātmika - pratīyasamutpāda, *nāmarūpāṅkuro svayaṃkṛto* (A1). In this thesis I intend to investigate Kamalaśīla's quotation of ŚSS in TSP.

In the *Sarvadharmāṇiḥsvabhāvasiddhi* (SDNS), Kamalaśīla quoted ŚSS (A1) for the purpose of criticizing opponents' view of dependent arising and in order to make a connection with Nāgārjuna's thought. But in TSP he uses ŚSS (A1) for the purpose of defending the doctrine of dependent arising from its critics. He further protects himself from his opponents by quoting the *Paramārthaśūnyatāsūtra* which is referred to in the *Yogācārabhūmi* and *Abhidharmakośabhāṣya*, rather than appealing here to Nāgārjuna.

At last year's conference, I pointed out that the composition of *avayavārtha* in TSP relates to the "four truths" in the *Yogācārabhūmi* and elsewhere (*Journal of Indian and Buddhist Studies*, 53-1, 2004, pp. 131-134).

So, by piecing these points together, I come to the conclusion that the position of Kamalaśīla, who quoted ŚSS in TSP, is linked to the tradition of Yogācāra.

#### 184. Does the Inscription with the Word "amridaha/amridae" After All not Refer to Amida-buddha ?

Asao IWAMATSU

In 1982 the late Prof. Brough published a very interesting article concerning a Gandhāran inscription. According to him, the inscription contains two words "amridaha" and "oloīspare," which he took to express the well-known names of the Mahāyāna Buddha Amitābha and Bodhisattva Avalokiteśvara. Exactly twenty years later, Profs. Salomon and Schopen published under their joint authorship another article dealing with the inscription. In it they rejected Brough's interpretation. Their argument is persuasive; thus it seems that in general their conclusions are admissible, except for one point of interpreting the 'difficult,' according to their wording, word "oloīspare." Regarding this word, they proposed a different interpretation from that of Brough, taking it as indicating a toponym of an 'unknown' place. But it is problematic (at least to the present author). The present author wants to give the word another interpretation than the above-mentioned two, taking it to denote an 'epithet' of the Central Buddha of the Triad. His overall conclusion to the in-